

# 語彙・語句を入れた栄養士の養成科目試験 からの検討

加藤 由美子、原田 まつ子

## Examination from the training subject examination of the dietician who put vocabulary, a phrase

Yumiko KATOH, Matsuko HARADA

### 要約

本学食物栄養専攻の学生を対象に、常時学習している調理、食品、栄養、栄養指導系科目に関する問題および語彙や語句に関する「総合試験」を実施した結果を報告する。

- ・食品系・栄養系・栄養指導系科目の平均値は、調理系科目に比べて低く、そのばらつきも大きかった。
- ・語彙・語句の最も低い点数（15～30点）の人数は22.3%（24人）と他の科目に比べて多かった。
- ・語彙・語句に関する点数を高低2群に分け、調理系科目、食品系科目、栄養系科目、栄養指導系科目との関連をみたところ、食品系科目、栄養系科目、栄養指導系科目に比べて有意に低かった（ $p=0.002$ ,  $p=0.008$ ,  $p=0.013$ ）。

### I 目的

近年の社会状況の変化は、言葉や人間関係の在り方に大きな影響を及ぼしている。

言葉の変化のうち、語彙に関するものの多くは、新語・流行語・外来語・専門用語等の増加であり、そのことが言葉遣いなどの変化とあいまって、世代間で使用する言葉の差を広げる結果ともなっている。言葉が伝達手段として十分に機能するには、相手や場面にふさわしいものでなければならず、不適切である場合には伝達不能となるだけでなく、人間関係の阻害にもなりかねない。

また、若い世代において、言葉を用いて人間関係を築き、維持していく「人間関係形成能力」が衰えているとの指摘もある。読書の少なさが原因と言われている国語力が、「人間関係形成能力」の基礎として、その人間の能力を構成する大きな要素となっていることを考えると納得のいく事実である<sup>1), 2), 3)</sup>。

一方、大学生の学力低下についても、「授業が成り立たない等、深刻な問題」と回答している教員が8%、「やや問題」と回答したのが53%と、それに対応した補習授業を実施する大学の増加も報告されており<sup>4)</sup>、その対策として、佐藤は、初年次教育やリメディアル教育の中で、レポートの書き方など、大学の学びに必要な書き言葉の養成が行われているが、話し言葉と隔たりがある書き言葉を習得するには意識的な学習の必

要があることを説いている<sup>5)</sup>。

このように、大学生の学力低下、さらには社会変化やそこから引き起こされる様々な問題があることを前提としても、柔軟に対応していくには、文系・理数系に限らず、今まで以上に国語の力を高めていくことが重要と思われる。

そこで、食物栄養の学生が、常時学習している調理・食品・栄養・栄養指導に関する問題のほかに、語彙や語句に関する試験を行い、その理解状況の結果を今後の教育指導に繋げるための調査を行った。

### II 調査方法・内容・分析方法

1. 対象学生：食物栄養専攻2年次学生95名、年齢は $19.3 \pm 1.2$ 歳
2. 調査期間：平成26年10月6日～10日（5日間）
3. 質問票と解答方法：問題数は50問とし、内容の内訳は、調理系科目12問、食品系科目10問、栄養系科目11問、栄養指導系科目7問および語彙・語句系科目10問とした。

回答方法はマークシートにより5つのうち正解と思うもの1つを選択させた。点数は1問につき2点として、合計点数を100点とした。

各科目の点数および総合点数を算出後、語彙・語句の中央値（42.9）を境に、それ以上を高群、それ未満を低群として2群に区分後、調理、食品、栄養、栄養

指導系科目との関連を比較した。

統計ソフトはSPSS Ver.19 は使い、Mann-Whitney の U および t 検定を使用した。

### Ⅲ結果・考察

図1～6に、総合試験および各科目の度数分布を示した。

度数分布表の中で、最も高い点数およびその平均値±標準偏差は、総合試験40～50点(37人)  $44.9 \pm 9.3(M \pm S.D)$  で、調理系科目45～60点(44人)  $47.8 \pm 12.3$ 、食品系科目35～50点(38人)  $45.6 \pm 16.6$ 、栄養系科目35～50点(35人)  $42.7 \pm 15.1$ 、栄養指導系科目30～45点(29人)  $36.9 \pm 18.9$ 、語彙・語句45～60点(35人)  $47.0 \pm 15.4$ であった(図1～6)。全科目を通して平均値は低かったが、栄養士関連科目の中では、調理系科目に比べて食品系・栄養系・栄養指導系科目の平均値が低く、そのばらつきも大きかった。また、語彙・語句の平均値は、調理系科目と同等であったが、語彙・語句の最も低い点数15～30点の人数をみると22.3%(24人)で、調理系・食品系・栄養系・栄養指導系科目に比べて多かった(図1～6)。

表1に、語彙・語句の中央値(42.9)を境に、高・低群2群に区分し、各科目の点数の違いを比較したものを示した。

語彙・語句の2群を比較すると、調理系、食品系、栄養系、栄養指導系科目の低群の平均値は、高群に比べ点数が低かったMan-Whitney の U 検定結果では、食品系、栄養系、栄養指導系科目の低群の点数は、高群に比べ有意に低かった ( $p=0.002, p=0.008, p=0.013$ )。

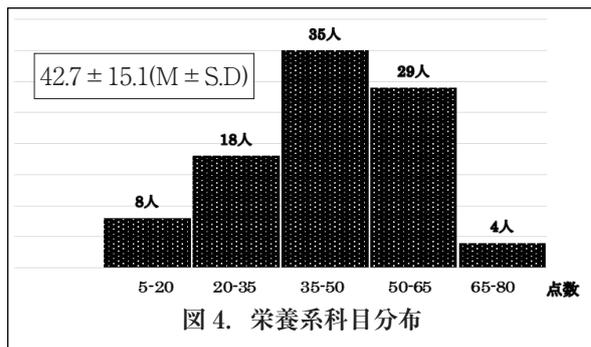
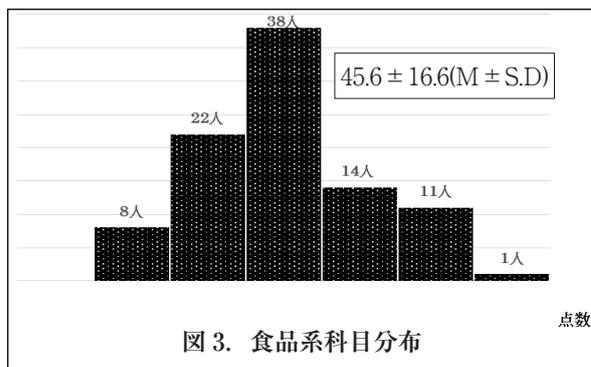
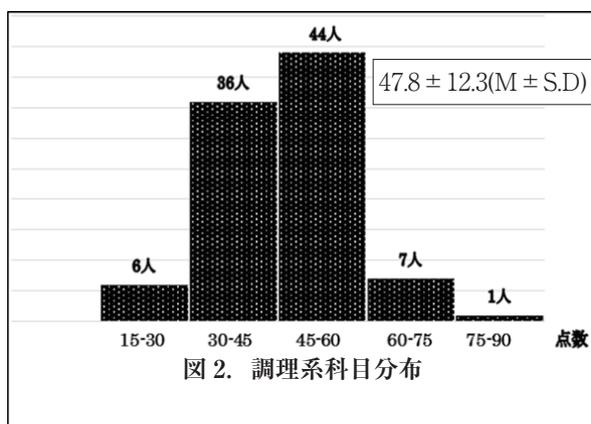
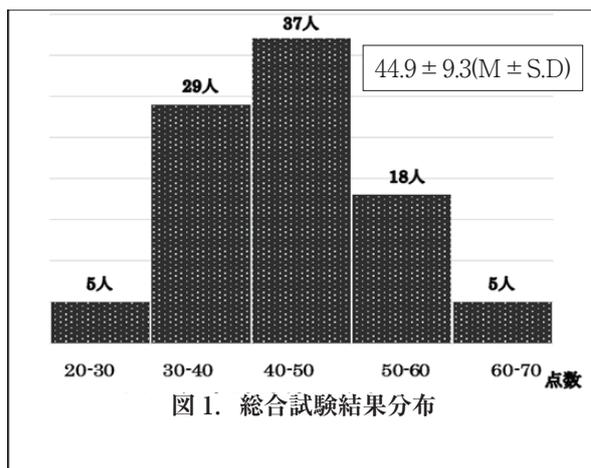
また、栄養系、栄養指導系科目の平均値は、調理系、食品系科目に比べ両群ともに点数が低かった。

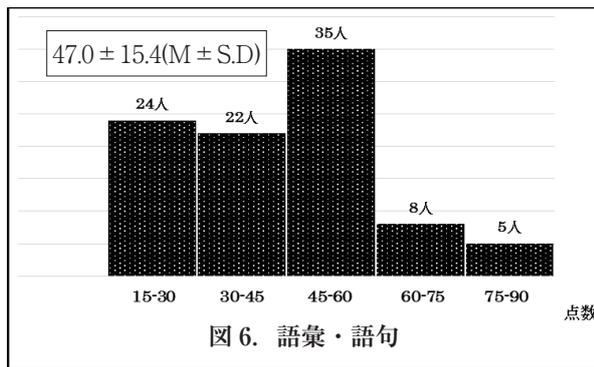
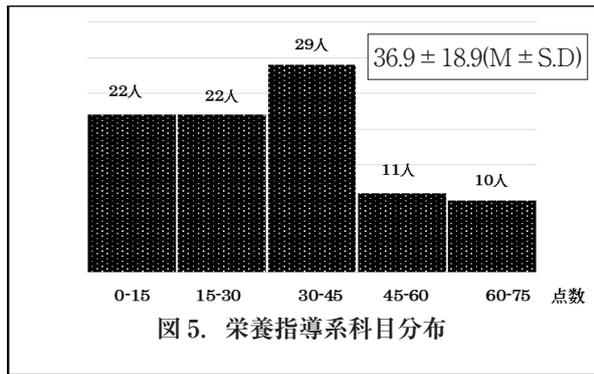
調理系、食品系科目の試験内容は、普段の生活の中で目につきやすい食品や日々の食事を作る実践の中で習得することができやすい内容といえる。しかし、栄養系、栄養指導系科目の試験内容は、目につきにくい食事摂取後の代謝や直接的に関わることが少ない法規が中心であった。そのため、非現実的なイメージが強い栄養系、栄養指導系科目の点数が低かったのではないかと推測された。

今回の試験結果は良好な結果ではなく、筆者らの反省の一つとなったが、今後の課題も現れてきた。

近年の学生の低学力の現状に対する対策としては、先に述べたように多くの養成校が教育を行っている。

本学専攻の最終目的も、栄養士の資格を取得し、卒





業させることであるが、そのためには、各専門科目を習得することは必須であり、専門用語が記載されている教科書から学ぶことが基本となる。その教科書を読み解くには国語の力が重要と思われる。

国語の力は、文章をよりよく表わす表現力、文章を細かく丁寧に読み込む読解力、漢字や言葉の意味を多岐に渡って把握する語彙力等から成るが、この中で学びの土台となるのが語彙力であり、国語力の低下の原因の1位に語彙力を挙げている報告もある<sup>4)</sup>。

教科書を読む場合、語彙力がある場合は、文章を読む上でわからない言葉が出てきた際、前後の文脈から内容を想像することができるが、語彙力がない場合は、不明な言葉が多すぎて、文章そのものが理解できなくなるという状態が起り、語彙力は読解力を支配しているともいえる<sup>6)</sup>。PISA\*においての読解力は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義されている。

この力を高めるには、教科書を読解する力である語彙力の養成が欠かせない。これは、多くの意味を含んだ定義であるが、読解力・表現力を身につける以前に、言葉の意味がわからないのでは、本を読み進めることができなく、教科書に記載されている内容の理解度も低いと思われる。

多くの資格の取得のためには、その専門に関連する教科書・副読本やそれに関わる本を読み解き、理解することが必要である。栄養士の資格取得についても同様であるが、その資格の質の均一化と向上を目指すための評価は、栄養士の専門履修科目に限られて評価

表 1. 語彙・語句の2群間における栄養士関連科目の比較

	高群 <sup>1)</sup> (n=48)				低群 <sup>2)</sup> (n=46)				Mann-Whitney の		対応のない t 検定 p 値	
	Mean	±	S.D	Median	Max-Min	Mean	±	S.D	Median	Max-Min		U 検定 P 値
総合得点	44.9	±	9.4	43.0	66.0-24.0	44.8	±	9.5	44.0	62.0-24.0	0.885	0.963
調理系科目	49.1	±	12.5	50.0	83.3-25.0	46.4	±	12.3	50.0	66.7-16.7	0.347	0.284
食品系科目	50.8	±	16.2	50.0	90.0-10.0	40.2	±	15.6	40.0	70.0-10.0	0.002	0.002
栄養系科目	46.8	±	14.6	45.5	72.7-9.10	38.5	±	14.6	36.4	63.6-9.1	0.008	0.008
栄養指導系科目	41.4	±	18.2	42.9	71.4-0.0	32.3	±	18.9	28.6	71.4-0.0	0.013	0.020

<sup>1)</sup> 語彙・語句の中央値 42.9 以上を高群とした。

<sup>2)</sup> 語彙・語句の中央値 42.8 以下を低群とした。

することが多く、表現力・読解力・語彙力といった国語の力を評価することが少ない。田島は、入学前までの語彙はもちろんだが、入学後であっても語彙・専門語彙へ接する度合いは個人により大きく異なり、インプットの少ない学生は少ない状態を維持することが多いと述べている<sup>2)</sup> ことから、成人になってからの語彙力を伸ばすことは簡単ではないことが推測される。さらに、入学時と1年後・2年次以降の日本語の語彙

力到達度テストを比較した結果で、1年後の語彙力は伸びるが、1年次終了から2年次終了には伸びる学生と伸びない学生の差が顕著である調査から、橋本らは、後半期が専門用語を運用した専門教育の強化により、一般的な語彙が増えにくいためであるとも述べている<sup>7)</sup>。

本専攻では、栄養士の科目が理数系傾向であることから、総合演習 I において、数学基礎講座を授業とし

て3ヶ月間(10回)行っており、講座終了時の7月時には、ほぼ全員の点数の向上がみられる。しかし、普通の学生のレポートや提出物を採点する中で、講義で話したことや調べたことに対して要約してまとめることができる者、自分が伝えたいことは書けるが要約できない者、教員が伝えたことに対しての視点がほとんど外れて書けない者に、分かれていることを感じる。

理数系の科目は、比較的早期に効果をみることができ、国語の力は、多岐に渡るため、身につけるには時間を要する。しかし、その国語の力の中で、比較的早く能力が身につけられるのが語彙力であるとの報告もある<sup>8)</sup>。

栄養士は、食や栄養の専門家であり、正しい情報を収集して取捨選択し、内容を理解するだけでなく、活用しながら対象者や他の専門職に伝達できる力を求められている。そのため、小中高等学校で積み残して進んできてしまった学生には、やはり一定の「積み上げ」が必要であり<sup>9)</sup>、その積み上げの場を提供するのが教育機関の役目でもある。また、本学の基礎教育科目では、文章表現法が設定されているが、選択制であり全員の底上げには限界もあろう。そのため、文章を深く理解できる読解力や文脈に適した言葉を用いて各表現力の向上が、専門科目の学習習得能力を高める動機付けに繋がると考え、語彙力を高めることを検討することも必要であると思われる。

## 参考文献

- 1) これからの時代の時代に求められる国語力について  
<http://mest.go.jp/bmenu/shingi/bunka/toushin/04020301/003.htm>
- 2) 田島ますみ：大学生の日本語語彙力に関する自己評価 中央学院大学, 人間・自然論叢, 38, 2014
- 3) 平成20年度国語に関する世論調査  
[http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/yoron\\_chousa/h20/kekka.html/](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoron_chousa/h20/kekka.html/),
- 4) ベネッセ教育研究開発センターの調査, 2005  
<http://berd.benesse.jp/Benesse>
- 5) 佐藤尚子：大学での学びに必要な語彙力の養成, リメディアル教育研究, 第6巻, 第1号, 2001
- 6) 塚田泰彦：マッピングが生きる読みの世界, 語彙力と読書, 東洋館出版社, 2001
- 7) 橋本美香, 山口恒夫, 兵藤文則：川崎医療短期大学における語彙力に関する調査, 川崎医療短期大学紀要, 30号, 2010

8) 語彙力の大切さ <http://kosgi.net/goi.html>,

9) 千古利恵子・中條敦仁：語彙力を高める単語・語句学習のあり方, 京都文京短期大学, 京都文京短期大学, 研究紀要第51集, 2013

\* PISA : Programme for International Student Assessment 国際的学習到達度に関する調査

\*\*）総合試験出題参考テキスト：

- ① 栄養士認定試験 2012,
- ② 家庭料理技能検定 (3級),
- ③ 語彙・読解力検定 (3級)